

『三玉挑事抄』注釈 冬部（上）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』冬部の²⁶⁵番から³¹³番までを掲載する。凡例は秋部（上）と同じであるので省略する。担当者
はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

森あかね、風岡むつみ、廣瀬薫、松本匡由、島田薫、金子将大、北井達也、小森一輝、村上泰規

冬部

初冬

²⁶⁵冬^{柏玉}きては野沢に深き春の水のみとりをみねの松の一本

春水満^{三四}沢^一、夏雲多^二奇峰^一。秋月揚^三明輝^一、冬嶺秀^二孤松^一。

〔出典〕 柏玉集、一〇三一番。古文真宝前集、四時、二九頁。

〔異同〕 『新編国歌大観』「春の水の―春の水」。『古文真宝前集』ナシ。

〔訳〕 初冬

春の野べの沢は緑色の水に満ちていたが、冬が来ると緑は峰にある一本の松だけだなあ。

春は水がゆたかに四方の沢に満ちる。夏はさまざまのおもしろい形の雲の峰が、空高くに湧き上がる。秋は月が明るい光を放ち、冬は木の葉の落ちた嶺には、一本松の緑が群をぬいて一きわ高く仰がれる。

〔考察〕「四時」は晋代の詩とされ、春夏秋冬それぞれの風物を取り上げ、自然の大観における美を詠じる。当歌は「四時」に詠まれた春と冬の風景を踏まえ、冬の到来による自然景を春との対比して詠む。冬になると松の緑が目立つことは、303・304番歌、参照。

〔参考〕「四時」は116番歌にも掲載。『円機活法』には陶潜詩とされ、夏の部分のみ引用。

（森あかね）

初冬落葉

266 一葉にもおとろき初る秋の風はらひ尽して冬は来にけり

淮南子。一葉落而天下知秋。

〔出典〕雪玉集、三三〇九番。淮南子、卷一六、九四五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和刻 古今事文類聚 前集』「落而―落」。

〔訳〕 初冬の落葉

一枚の葉が落ちて初めて（秋の訪れに）驚く、その秋風が葉を落とし尽くして冬は来たのだなあ。

淮南子。一枚の葉が落ちて、天下は秋を知る。

〔考察〕『淮南子』の一節は、身近なことによって未来を察知することを意味する。当歌は『淮南子』を踏まえなが

ら、冬の到来を詠む。

〔参考〕『淮南子』の本文は「見一葉落、知歳之将暮」で異なる。寛文六年（一六六六）刊『和刻古今事文類聚』巻一〇・秋部は『淮南子』を出典に掲げる。（133番歌、参照）。

（風岡むつみ）

紅葉随風

267 恨あれや風のちからはおたしくてすくなきにしもたへぬ紅葉、

文選。陸士衡、豪士賦序。落葉俟^{ニツテ}微^一風^ヲ以隕^ツ。而風^ノ之力蓋^シ寡^シ云云。

〔出典〕雪玉集、一四六八番。文選、文章篇中、五〇二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「おたしくて―けだしくも」。『和刻本 文選』ナシ。

〔訳〕紅葉、風に随う

（風を）恨むのだろうか。風の力は穏やかで少ないのに、それに耐えられない紅葉の葉は。

文選。陸士衡の豪士の賦の序。落ちようとする木の葉は、微かな風が吹けば落ちる。しかし、その風の力は少ない云々。

〔考察〕陸機（字は士衡）の文章は、何か物事を成すために必要なのは自己のあり方であり、外的な条件は二の次であるということ、季節が秋を迎えたために葉は自らの性質によって落ちるのであり、風の力によるところは少ないという比喩を用いて表現したもの。第三句「穏しくて」（穏やかでという意）は、『新編国歌大観』では「けだしくも」で出典の「蓋^{けだ}し寡^{すくな}し」により近い表現となる。

〔参考〕『源氏物語』少女の巻に、秋の情感に心を打たれた内大臣（かつての頭中将）が和琴を奏で、「風の力けだしすくなし」と口ずさむ場面がある。『和刻本 文選』は慶安五年（一六五二）版。

（廣瀬薫）

朝時雨

²⁶⁸見し夢のあしたの雲よたか為か夕をまたす時雨行らん

〔出典〕雪玉集、七八八〇番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 朝の時雨

夢で見た朝雲よ、（おまえは）誰のために夕べを待ちきれず時雨を降らせているのだろうか。

〔考察〕当歌は「旦^{あした}には朝雲と為^なり、暮には行雨と為る。」（269番歌に掲載）による。

（金子将大）

²⁶⁹夕こそ雨ともならめしくれ行あしたの雲よたかこゝろなる

高唐賦曰、妾^ハ在^ニ巫山ノ之陽、高丘ノ之岨^ニ。旦^{ニハ}為^ニ朝雲^一、暮^{ニハ}為^ニ行雨^一。朝々暮々陽台ノ之下。

〔出典〕雪玉集、一五五〇番。文選、卷一九、賦篇下、三四三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『和刻本 文選』ナシ。

〔訳〕 （朝の時雨）

夕方にはきっと本降りの雨になるだろう。時雨を降らせて行くこの朝雲よ、（それは）誰の心なのか。

高唐賦によると、私は巫山の南側にある険しい峰の頂に住んでいます。朝には雲となり、夕方には 通り雨と なって、毎朝毎晩この楼台のもとに参りましょう。

〔考察〕「高唐賦」は宋玉が楚の襄王に向かって、巫山の近くに建てられた高唐の楼観の様子を述べたもの。出典の一節は、先王の夢に現れた女性のセリフ。

〔参考〕「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」（源氏物語、葵の巻、五五頁）。

（金子将大）

夕時雨

270 あかつきの霜にさくへき声もなししぐる、雲の入あひのかね^杓

山海経。豊山^一有^二九鐘^一焉。是^レ知霜^ヲ鳴^ル。

〔出典〕柏玉集、一〇四四番。山海経、第五、中山経。〔異同〕『新編国歌大観』『玉海』ナシ。

〔訳〕 夕べの時雨

夜明け前に霜に应じて鳴るといふ、豊山の鐘の音も聞こえない。（その代わりに）時雨を降らす雲の中から、夕暮れ時につく鐘の音（が聞こえてくるなあ）。

山海経。豊山に九つの鐘が有る。この鐘は霜を知って鳴る。

〔考察〕鐘が霜を知って鳴るとは、霜が降りると鳴るといふ意味。『山海経』の本文を抄出した至元三年（一三三七）版『玉海』（国立国会図書館デジタルコレクション）は、南宋の王应麟の撰。前野直彬著『全釈漢文大系 第三三卷 山海経・列仙伝』（集英社、一九七五年）によると、「豊山」と「有九鐘焉是知霜鳴」の間に「有^レ獸焉。其状如^レ鰻、赤目赤喙黄身。名曰^二雍和^一。見即国有^二大恐^一。神耕父处^レ之。常遊^二清冷之淵^一、出入有^レ光（清冷水在^二西号郊隄山上^一。神来時、水赤有^二光輝^一。今有^レ屋祠^レ之。）見即其国為^レ敗。」という文章が入る。

〔参考〕「暁の鐘を聞かずは霜さゆる夜半とも知らじ炉火の本」（続草庵集、三〇二番）

（北井達也）

枕上時雨

271 聞わかぬしくれよいかに枕せしなかれは水のひゝきなからに

晋書。孫楚事實、見于秋部。

〔出典〕雪玉集、一五五三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 枕元の時雨

（水の流れる音と）聞き分けられない（ほど激しい）時雨よ、どれほど（降っているのだろう）か。孫楚が枕にしていた水の流れは、昔と同じ響きであるが。

晋書、孫楚の事、秋の部に見える。（154番歌、参照）

〔考察〕枕元で時雨の響きを聞き、孫楚の漱石枕流の故事を連想して、孫楚が枕にしていたという流れの音と、雨音とが区別できないほどだと詠む。

（小森一輝）

窓落葉

272 枝の雪もいまやみてまし窓ふかくあつめぬ物の積る栂このほに

〔出典〕柏玉集、一〇六三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 窓辺の落葉

枝の雪も今は見ているだろうか。(雪のように) 窓辺にうず高く集めてもいないのに、積もっている落ち葉を。

〔考察〕当歌の「枝の雪」と「窓」は『源氏物語』(273番歌に掲載)による。

(松本匡由)

落葉窓深

273 色同こきは木の葉も窓の光にておもはぬ枝の雪ぞつもれる

乙女巻云、まとの蛍をむつひ、枝の雪をならしたまふ云々。

〔出典〕柏玉集、一〇六四番、一九六二番。源氏物語、乙女巻、一五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『落葉窓深―落葉深窓』(一九六二番)。「承応」『湖月抄』ナシ。

〔訳〕落葉、窓辺に深し

落葉の色が濃いのも窓からの光のせい、思いがけないほど枝に雪が積もっているなあ。

乙女の巻によると、(夕霧は高貴な身分で、出世は保障されているのに) 蛍雪の功をお積みになる云々。

〔考察〕「窓の蛍を睦び、枝の雪を馴らしたまふ」とは、窓辺の蛍の光を友として枝の雪に親しむように勉学に励むという意味で、夕霧が大学で学ぶ志を称賛した場面。『蒙求』の「孫康映雪、車胤聚螢」(家が貧しく雪の明かりで本を読んだ孫康、螢の光で学んだ車胤の故事)を踏まえる。

(松本匡由)

水郷寒声

274 しほれあしのよるくいに川つらの冬に成行波風の声

『三玉挑事抄』注釈 冬部(上)

薄雲巻云、冬になり行まゝに、川つらの住ゐいと、心ほそさまさりて。

〔出典〕雪玉集、三九八番。源氏物語、薄雲巻、四二七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 水郷の寒声

寒さで枯れた芦が川辺に夜ごと打ち寄せられると、さぞかし波風の音は冬になっていくのだろうか。

薄雲の巻によると、冬になるにつれて、川のほとりにある住まいはいっそう心細さがつのつて。

〔考察〕『源氏物語』は、明石の君たちが住む大堰川ほとりの邸宅の心細さを描く。第二句の「よる」は、「夜」と「寄る」の掛詞。また「寄る」は「波」の縁語。

（村上泰規）

垣根寒草

25 冬草のしたの心や数ならぬ垣根ながらも春をまつらん

初子巻の詞、春の部に見えたり。

〔出典〕雪玉集、一五九一番。〔異同〕『新編国歌大観』『垣根―牆根〕

〔訳〕 垣根の冬草

冬草は内心、身分の高くない者の垣根に生えていても、春を待っているだろうか。

初音の巻の文章、春の部に見える。（10 番歌、参照）

〔考察〕初音の巻は、「数ならぬ垣根」（低い身分の者の垣根）の内にも春が訪れるという場面。当歌も春を待つ、庶民の垣根の草の心を詠む。

鶴払霜

276霜はらふ鶴の毛衣やはらかにぬるよもなしと音をや鳴らん栴

催馬楽、貫河。一段ぬき川のせゝのやはらたまくら、やはらかにぬるよはなくて、おやさくるつま。下略

〔出典〕三玉和歌集類題、鶴払霜。催馬楽、貫河、一二三頁。

〔異同〕『三玉和歌集類題』『やはらかに―和かに』。『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕 鶴が霜を払う

霜を払う鶴の羽毛は柔らかで、柔らかに寝る夜もないと鳴いているのだろうか。

催馬楽、貫河。一段貫河のあちこちの瀬に立つ波は荒々しくて柔らかでないように、私の腕を枕にして、(い
としいあなたと)柔らかに共寝する夜はなくて、両親が会わせてくれない妻よ。下略

〔考察〕「貫河」は、親に仲を裂かれながらも純愛を歌い合う男女の掛け合いから成る。当歌は霜を払う鶴に、男に会
えずに嘆く女の姿を重ねて詠む。第三句「やはらかに」は「鶴の毛衣」と「寝る」を修飾する。

〔参考〕「貫河」の解釈は『梁塵愚案抄』の本文「せゝの手枕」は波枕と云か如し。波はあらし物なれば、「やはら
かにぬる夜はなき」と枕によせていへり。「おやさくる」は父母として子の妻をさくる也」による。

(金子将大)

残菊句

277をのかため折のこす枝にあらなくにこてふそ菊の匂ひをはしる

三鉢詩。節去蜂愁蝶不_レ知、曉庭還_テ繞_ニ折殘_ス枝_ヲ、自縁_ニ今日人_ト心_ヲ別_ニ、未_ニ必_{シモ}秋香_ハ一_ニ夜_ニ衰_ニ。

〔出典〕雪玉集、五二八〇番。三体詩、卷上、十日菊。〔異同〕『新編国歌大観』『三体詩』ナシ。

〔訳〕 残菊の匂い

自分のために折り残した菊の枝ではないのに、蝶は菊の匂いを知（り飛び回）っているなあ。

三体詩。菊の節句が過ぎたのを蜂は憂えているが、蝶は気づかず、明け方の庭に折りしだかれた菊の枝をなおも飛び廻っている。（菊の色香が変わって見えるのは）今日の人の心が変わったからであり、菊の花の香りが一夜で衰えたわけではない。

〔考察〕「十日菊」は節句を過ぎると顧みられない菊の花に同情した漢詩。第二句の「折残」について村上哲見著『三体詩 上』（新訂中国古典選16、朝日新聞社、一九六六年）では、「残」は、敗残、衰残などにおけるように、動詞のあとにそえられて、すたれる、だめになってしまふの意をあらわす。「折残」は折られてすたずたになつてしまつてゐるということ。折られたあとに残る、ではない。」と解釈する。それに対して当歌の「折り残す」は折らずに残すという意味で、咲き続ける菊花の香りに気づいて近寄る蝶を詠む。

（金子将大）

石間水

278 水_柏りけりひまなく水も石川や花田の帯の中絶てみゆ

催馬楽、石川。いしかはんのこまうとに、帯をとられて、からきくいする。二段いかなんる、いかなる帯ぞ、花田の帯の、中は絶たる。下略

〔出典〕三玉和歌集類題、冬、石間氷。催馬楽、石川、一四九頁。〔異同〕『三玉和歌集類題』『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕 石間氷

隙間も無く氷つてしまったなあ。絶え間なく（流れていた）水も絶えて見える。石川の（高麗人に取られた）はんだて縹色の帯の真ん中が絶ち切れたように。

催馬楽、石川。石川の高麗人に、帯を取られて、ひどく後悔している。二段どんな、どんな帯なんだい、縹色（薄藍色）の帯で、真ん中が切れている。下略

〔考察〕催馬楽「石川」で帯が絶えたことを踏まえて、当歌は石川の流氷が氷つて絶えてしまったと詠む。「ひまなく」流れていた「水」が「ひまなく」「氷りけり」の結果、「帯」が「絶え」るように「水」も「絶え」た、という技巧である。

〔参考〕本文異同には元禄二年（一六八九年）版『梁塵愚案抄』（早稲田大学古典書籍総合データベース）を使用（150番歌、参照）。

（北井達也）

氷間細流

279 海川柏にいとほぬ水の心をもしらぬ氷のあさきへたてよ

史記。李斯カ上書ニ云、泰山ハ不レ讓ニ土壤ニ故ニ能ク成ニ其一大、河海ハ不レ擇ニ細流ニ故ニ能ク成ニ其一深。明水ニ賦

〔出典〕該当歌ナシ。史記、李斯列伝第二七、四六一頁。〔異同〕『史記』『泰山―太山』『能成其深―能就其深』。

〔訳〕 氷が小川を閑とぜず

大海や黄河には（細い流れでも）厭わず受け入れる水の心があるのに、氷がそれも知らない（で小川を閉ざす）とは浅はかな分け隔てだなあ。

史記。李斯が上書して言うには、泰山は塵のような土でも受け入れ積み上げるため、あのように大きくなるのです。黄河や大海はどんな小川の水でも受け入れるため、あのような深い河になるのです。

〔考察〕『史記』は、人民を棄て賓客を斥ける秦の始皇帝を李斯が諫め、他人の意見を広く受け入れないと大成しないと説いた故事。当歌はそれを踏まえ、氷が張っても大きな水の流れは止められないが、小さい水流は塞ぎ止められる様子を、流れの大小で分け隔てする浅はかな思慮と見立てた。

〔参考〕「朗詠二厭」という傍注が示す通り、北村季吟『和漢朗詠集注釈』には「河海^ハ不^レ厭^ハ細流^ニ」とある。

（北井達也）

懸樋氷

280 氷けりしたひの水よたか為になかる、ことの緒をもたちけん

列子、湯問篇。伯牙^ヲ善^ク鼓^ス琴^ヲ、鍾子期^ヲ善^ク聴^ク。伯牙^ヲ鼓^{シテ}琴^ヲ志在^レ登^ニ高山^一。鍾子期^カ曰^ク、「善^{カナ}哉。峩々^々若^シ泰山^一」。志在^ニ流^一水^ニ。鍾子期^カ曰^ク、「善^{カナ}哉。洋洋^々兮若^シ江河^一」。

呂氏春秋曰、鍾子期^ノ死ス。伯牙^ヲ破^レ琴^ヲ絶^レ絃^ヲ終^ニ身^ヲ不^ニ復^タ鼓^シ琴^ヲ云云。

〔出典〕雪玉集、三五一三番。列子、下、湯問第五、二四七頁。呂氏春秋、卷一四、本味、三七六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「たちけん―たつらん」。『列子』『呂氏春秋』ナシ。

〔訳〕懸樋の水

凍ってしまったなあ、下樋の水よ。誰のために、流れる（水に心を寄せて弾いた）琴の緒をも絶ってしまった（ように水の流れも絶えた）のだろう。

列子、湯問篇。伯牙は上手に琴を弾き、鍾子期はその音色を上手に聞き分けた。伯牙は琴を弾きながら、高い山に登る気持ちを表現した。鍾子期は、「素晴らしい。まるで泰山がそびえ立っているようだ」と言った。伯牙が流れる水に心を寄せて弾いた。鍾子期は、「素晴らしい。まるで江河が水を湛えているようだ」と言った。呂氏春秋によると、鍾子期が死んでからというもの、伯牙は琴を壊して絃を絶ち、終生弾くことはなかった云々。

〔考察〕歌題の「懸樋」も第二句の「下樋」も水を導く樋であるが、懸樋は地上に架け渡し、下樋は地中に埋める。歌題と異なるのは、下樋には琴の空洞になった部分という意味もあり、下の句の「琴の緒」の縁語になるからであろう。伯牙と鍾子期の故事は「知音」の由来になる。

〔参考〕『列子』の本文校合には寛永年間（一六二四～一六四四）刊『列子虞齋口義』、『呂氏春秋』の校合には江戸前期版本を使用。いずれも長澤規矩也編『和刻本諸子大成』（汲古書院、一九七六年）所収。

（小森一輝）

深山炭竈

281 みねたかみやく炭かまやけた物の空にはえけん道もたつねん

列仙伝曰、劉安^ハ漢ノ高帝ノ孫封^ニ淮南王^ニ。好^ニ儒術^ヲ方技^ヲ作^ニ内書^ニ二十一篇^ヲ。又著^ニ鴻宝万年^ニ二卷^ヲ論^ニ變化^ヲ之道^ヲ。中略 於是与^レ安登^レ山^大祭埋^ニ金^ヲ於地^ニ白日^ニ昇天^ス。八公与^レ安所^レ踐之石、皆陷。至^レ今有^ニ人^一馬

之迹^ニ存^{セリ}焉。所^ニ棄置^ス藥鼎、鷄犬舐^レ之^ヲ並^ニ得^ニ輕拳^ス鷄鳴^ニ雲^ノ中^ニ犬吠^ニ天上^ニ。

〔出典〕雪玉集、三六二〇番。列仙全伝、劉安。〔異同〕『新編国歌大観』『列仙全伝』ナシ。

〔訳〕 奥山の炭窯

峰が高いので（天に昇るのにふさわしく）、炭を焼く炭窯があり、けだものが天空で吠えたという昇天の道も捜し求めようか。

列仙伝によると、劉安は漢の高帝の孫で、淮南王に封じられた。劉安は儒教の秘術を好み、『淮南子』内書二十一篇を編んだ。また、『鴻宝』『万年』二巻を著し、神仙鍊金の術を論じた。中略 ここにおいて、劉安と山に登り、盛大に祭をして、金を地に埋め、白日の下に昇天した。八公（八人の神仙）と劉安が踏んだところの石はすべて陥没し、今になっても人馬の跡が残っている。捨てて置かれた藥鼎^{やくてい}（薬を作る鍋）を鷄や犬が舐めて、これらも軽々と飛び上がり、鷄は雲中に鳴き犬は天上に吠えた。

〔考察〕当歌は深山に立ち上る炭窯の煙を、劉安の藥鼎から立ち上る煙に見立てた。第二句の「焼く炭窯」に「焼く炭」と「炭窯」を掛ける。引用本文の「内書二十一篇」とは『淮南子』を指し、内書が二編、中書が八編、外書が三編あったが、現存するのは内書二編のみ。

〔参考〕「列仙伝曰」とあるが『列仙伝』の本文とは異なり、明代に編まれた『列仙全伝』による。本文校合には慶安三年（一六五〇）版『絵像列仙全伝』（同志社大学図書館蔵）を使用。『列仙伝』は七十余名（諸本により異同あり）の仙人の話を載せるが、「劉安」の項を立てないものも多い。たとえば寛政五年（一七九三）版『列仙伝』は仙人七十名で、「劉安」の項はない。ちなみに『神仙伝』にも「劉安」の項があり、本文は『列仙伝』よりも詳述。

なお寛文六年（一六六六）版『古今事文類聚』は「鵝犬舐鼎」として劉安の記事を載せ、『列仙伝』の記事に近い。

（小森一輝）

冬月冴

282 浦遠き水より出て水よりもさむき氷をしける月かな

荀子。氷^ハ生^{シテ}於^ニ水^{ヨリ}而寒^ニ於^ニ水^{ヨリ}。

〔出典〕雪玉集、三五一四番。荀子、巻第一、勸学編第一、一五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『荀子』「氷生於水——氷水為之」。

〔訳〕 冬の月が冴える

海辺から遠い水平線から出てきて、水よりも寒々とした氷を敷きつめた（かのように水面を照らす）月だなあ。

荀子。氷は水から生まれて水よりも冷たい。

〔考察〕『荀子』は「出藍の誉れ」（303番歌、参照）の本文に続く一節。

〔参考〕「月照平沙」夏夜霜（白楽天。和漢朗詠集、夏夜、一五〇番）では、月に照らされた砂原の輝きを霜に例える。

（松本匡由）

冬月

283 すさましきためしといへとすむ月のあはれは冬の空にそ有ける

総角巻云、世の人のすさましきことにいふなる、しはすの月夜の、くもりなくさし出たる。

簞記云、しはすの望の頃、月いとあかきに物語しけるを、人みて、「あな、すさまじ。しはすの月夜にもあるかな」といひければ云々。

枕双昏に、すさまじき物、しはすの月夜、おうなのけそう云々。

〔出典〕雪玉集、六六三三番。源氏物語、総角卷、三三三頁。河海抄、卷九（槿の卷）、卷一八（総角の卷）。

〔異同〕『新編国歌大観』「ためしといへと―ためしにいへと」。『承応』『湖月抄』ナシ。『河海抄』卷九「望の頃―も」ちころ「人みて―人みてこれそ」「月夜にも―月夜も」。『河海抄』卷一八ナシ。

〔訳〕 冬の月

おもしろからぬことの譬^{たとへ}だと言うが、澄んだ月の趣は冬の空にあったのだなあ。

総角の巻によると、世間でおもしろからぬ譬に引くという、十二月の月が曇りなくさしのぼってきた。

簞記によると、十二月の望月の頃、月がたいへん明るいつきに世間話をしていたのを、人が見て、「ああ、おもしろくない。十二月の月であるなあ」と言ったので云々。

枕草子に、おもしろからぬこと、十二月の月夜、年をとった女の恋云々。

〔考察〕当歌と同じ趣旨のことは、『源氏物語』で光源氏が「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空」を称賛して、「すさまじき例^{たとへ}に言ひおきけむ人の心浅さよ。」（朝顔の巻、四九〇頁）と述べている。「簞記」は『河海抄』卷九の「すさまじきためしにいひをきけん」項（玉上琢磨編『河海抄』三六七頁、角川書店、昭和四三年）、「枕双昏」は『河海抄』卷一八の「よの人のすさまじきことにいふなるしはすの月夜のくもりなくさしいてたるを」項（同書、五六三頁）に引かれている。

〔参考〕『簞物語』（別名「小野簞集」「簞日記」「小野簞記」）は平安後期頃に成立した作者未詳の物語。文人政治家として著名な小野簞に名を借りた人物を主人公とする実録風の短篇物語で、二話よりなる。引用箇所は彰考館本では一八行目にある。また、現存する『枕草子』には「師走の月」「媼の懸想」の一節はない。

水鳥

（松本匡由）

284 氷る夜はくかにまとふも水鳥のしたやすからぬ音をや鳴らん

玉かつらの巻。只、水鳥のくかにまとへる心地して。

〔出典〕雪玉集、一六五二番。源氏物語、玉鬘巻、一〇二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「まとふも—まよふも」。『湖月抄』『承応』ナシ。

〔訳〕 水鳥

（水面が）凍る夜は陸に上がってさまよう水鳥も、水面下で足を絶え間なく動かして、せつなく鳴くように、陸でも鳴いているのだろうか。

玉鬘の巻。ただ水鳥が陸に上がってさまようような心地がして。

〔考察〕『源氏物語』は肥後の豪族である大夫監の強引な求婚から逃れるため、ようやく上京した玉鬘一行が、頼るあてもなく途方に暮れている様子を水鳥に例えた一節。

〔参考〕「水鳥の下安からぬ思ひにはあたりの水もこほらざりけり」（拾遺集、巻第四、冬部、二二七番、よみ人知らず）。「水鳥の下安からぬ」とは、水鳥が水面下で足をせわしなく動かすので水が落ち着かず凍らないことで、人が

内心もだえ思慕するさまに重ねて詠むこともある。

冬歌中

（村上泰規）

285 あひおもふともねしてたにあらし吹梢のをしのわひつ、や鳴

搜神記曰、宋ノ時、大夫韓憑娶^レ妻^ヲ而美^也。康王奪^レ之^ヲ云云。宿昔ノ之間、便^チ有^二大梓木^一、生^三於^二塚之端^一。旬^一日大盈^レ抱^ニ屈^レ体以相就、根交^ニ於^一下^一、枝錯^ニ於^一上^二。又有^二鴛鴦雌雄各^一一、恒^ニ栖^ニ樹^上晨夜不^レ去。交^レ頸悲鳴^ス。音^一声感^レ人^ヲ。宋人哀^レ之^ヲ遂^ニ号^ニ其^一木^ヲ、曰^二相思^一樹^ト。相思^ノ之名起^ニ於^一是^ニ云云。

〔出典〕雪玉集、四四一七番。搜神記、卷一一。

〔異同〕『新編国歌大観』「冬歌中―冬十五首」。『搜神記』「大梓木―梓木」「旬日大―旬日而大」「於是―於此」。

〔訳〕 冬の歌の中

互いに思いあつても、共寝することさえできないだろう。嵐が吹く梢にいる鴛鴦は、辛く思つて鳴くのだろうか。搜神記によると、宋の時代の役人長官であつた韓憑は妻を迎えた。美人だったので、康王が奪い取つてしまつた云々。幾晩も経たぬ間に大きな梓の木が、両方の塚から生えてきた。十日も経つと一抱えに余るほどになり、幹を曲げて近づきあい、下の方では根が、上の方では枝が交わつた。また鴛鴦が雌雄一羽ずつ現れ、いつもその木をねぐらにして、朝から晩まで離れなかつた。首をさし交えながら悲しげに鳴き、その声は人々を感動させた。宋の人々は哀れんで、その木に「相思樹」という名を付けた。「相思」という名称はここから始まつた云々。

〔考察〕当歌の第一・二句に「相思ふとも」と「共寝^{ともね}」を、第三句の「嵐」に「あらじ」を掛ける。嵐で激しく揺れる枝にいる鴛鴦は、一睡もできないだろうと詠む。『搜神記』の引用で「康王奪^レ之^ヲ云云」のあと大幅な省略があり、韓憑は自殺し、妻も後追ひ自殺したため、康王は埋葬して、二人の塚が向き合うようにさせたという内容である。

〔参考〕和刻本『搜神記』（古典研究会『和刻本漢籍隨筆集 第十三集』汲古書院、一九七四年）とは異同が多いため、本文異同には『四庫全書』所収の『法苑珠林』を使用。他にも『藝文類聚』『法苑珠林』『獨異志』『北戸録』『太平廣記』『太平御覽』『太平寰宇記』に引かれている。

嶋千鳥

（村上泰規）

286 玉手箱水の江白く浦しまのこのよあけぬと千鳥しはなく

河海抄引^リ 丹後国風土記^ヲ曰、長谷朝倉宮天皇ノ御世、浦奥^{シマ}ノ子独^リ乗^ニ小船^ニ為^レ釣^ヲ得^ニ五色ノ亀^ヲ。忽^ニ為^ニ婦人^ニ。其ノ容美麗。女娘教^テ令^レ眠^レ目^ヲ即^ニ至^ニ海中博^ニ大之嶋^ニ云云。奥子忘^ニ前日ノ期^ヲ忽^ニ開^ニ玉匣^ヲ。未^レ見之間芳蘭ノ之体率^ニ于風雲^ニ翻去^ニ云云。

〔出典〕雪玉集、一六四五番。河海抄、卷一五、夕霧卷、五一六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『河海抄』「長谷朝倉宮―長谷朝倉宮御宇」「浦奥子独―嶋子独」「奥子忘―嶋子忘」「未見之間―未瞻之間」「翻去―翻翻蒼天」。

〔訳〕 島の千鳥

浦島の子が玉手箱を開けた水の江は白み、夜が明けたと千鳥がしきりに鳴いている。

河海抄が引く丹後国風土記によると、長谷の朝倉の宮で天下を治めた天皇（雄略天皇）の御世に、浦島の子が独りで小舟に乗り、釣りをして五色の亀を得た。（その亀は）たちまち婦人になった。その容姿は美しかった。乙女は（浦島の子を）眠らせて、一瞬のうちに海上の大きな島に到着した云々。浦島の子は以前の約束を忘れて、すぐに美しい化粧箱を開けた。突如かぐわしい香の匂いが風雲と共に翻り去ってしまった云々。

〔考察〕当歌の第二句「水の江」は浦島伝説が伝わる地名、第四句「あけ」に浦島が玉手箱を「開け」たことと夜が「明け」たことを掛ける。

（島田薫）

湖千鳥

287^柏さ、波になくや千とりの山の井のあかてわかれし友したふらん

古今集、八、離別部云、しかの山こえにて、いし井のもとにて物いひける人の、わかれける折によめる。貫之むすふ手の雪ににこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

〔出典〕柏玉集、一一三九番。古今和歌集、卷八、離別歌、四〇四番。〔異同〕『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕 湖の千鳥

さざ波のもとで鳴いている千鳥は、山の井は（底が浅く濁りやすく）飲み足りないように、もの足りない思いで別れた友を懐かしく思っているのだろうか。

古今和歌集、卷八、離別部によると、志賀の山越えの時に、石で囲んだ清水のほとりで言葉を交わした人と別

れる際に詠んだ歌。貫之

掬い上げた手からこぼれる雫で濁る（ほど浅く水の少ない）山の井が充分に飲めないように、私は満足できない
思いであなたと別れたことだなあ。

〔考察〕貫之の歌の上の句は「あか」を導く序詞。「あか」に「関伽」（仏に供える水）と「飽か」を掛ける。

〔参考〕「山の井」（山中の清水）は底が浅いという考えは、『古今和歌集』の仮名序にも引かれた和歌「安積山影さへ
見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」（万葉集、卷一六、三八〇七番）による。

（島田薫）

冬歌中

288 あらはるゝ名にや高砂住の江の松もあひ生の雪のうちかな

古今序。高砂・住の江の松も、あひ生のやうにおほえ云々。

〔出典〕雪玉集、七二三四番。古今和歌集、仮名序、一三三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『冬歌中―冬十首』。『古今和歌集』ナシ。

〔訳〕冬の歌の中

慣れ親しんだ名高い高砂・住江の松も、長年なじんだ雪の中に姿を現わすなあ。

古今和歌集仮名序。高砂・住江の松までが長年の馴染みとして親しまれ云々。

〔考察〕『古今和歌集』仮名序は和歌の歴史を述べた部分の一節で、北村季吟『八代集抄』には「高砂・住の江は播州
・摂州両国の松の名所をよひ出て両所の松を相生のやうにおほゆると也」と注す。当歌はそれを踏まえつつ、高砂

・住の江の松も雪の中で紛れず姿を現わすことを詠む。第二句の「名にや高砂」に「名に高（名高い）」と「高砂」を掛ける。また第四句の「相生」は、「高砂・住江の松」と「雪」とを修飾する。

【参考】『古今和歌集』仮名序の当該箇所は、606番歌にも引用される。冬の松については303・304番歌、参照。

（金子将大）

薪

289 民の戸のけふりにきはふ九重にたのしきをつむ春や待らん

日本紀、廿九卷。天武天皇御宇四年、百寮諸人初_レ位以上進_レ薪云云。

雑令曰、凡進_レ薪之日、弁官及式部、兵部、宮内省、共_二檢校_{シテ}貯_二納主殿寮_ニ。

延喜式三十六日、年中所用御薪湯殿_{ミカマキ}料一百八十荷、御匣殿御洗料七十二荷、御沐料一百八十荷、御脚水料二百四十荷、御炊料七百八荷、儲料二百荷云云。

【出典】雪玉集、七九三三番。日本書紀、卷第二九、天武天皇下、三五九頁。令義解、卷一〇、雑令、進薪条。延喜式、卷三六、主殿寮、年中薪。

【異同】『新編国歌大観』「にきはふーにきはふ」。『日本書紀』『令義解』『延喜式』ナシ。

【訳】 薪

民の戸からは炊事の煙が豊かに出ていて、豊かな宮中では薪を積み、楽しみを積み重ねる春を待っているのだろうか。

日本書紀、二十九卷。天武天皇の御宇四年、初位以上の百官の人々は薪を奉納する云々。

雑令によると、薪を奉納する日は、弁官及び式部、兵部、宮内省、共に監督して、主殿寮に貯納する。

延喜式三十六卷によると、年間で用いる御薪は、湯殿のために百八十荷、御匣殿の洗髪のために七十二荷、沐浴のために百八十荷、脚洗いの水のために二百四十荷、炊事のために七百八荷、蓄えのために二百荷云々。

〔考察〕『日本書紀』は、宮廷所用の薪を百官が奉る行事を記した箇所。「雑令」は薪を献納する日の規定、『延喜式』は年間に用いる薪の量を記した箇所。当歌の第二句「にぎはふ」は「けふり」と「九重」を修飾し、第四句「たのしき」の「き」に「木」を掛ける。また、「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」（新古今和歌集、卷七、賀、七〇七番、仁徳天皇）も踏まえる。

〔参考〕本文異同には、寛文九年（一六六九）版『日本書紀』、寛政一二年（一八〇〇）版『令義解』、享保八年（一七二三）版『延喜式』を使用。貞治五年（一三六六）の『年中行事歌合』に、「百敷のものつかさの御かま木に民のけぶりもにぎはひにけり」（八番、左、御薪、家尹朝臣みかまぎ）とあり、その判詞に「御薪と申すは百官悉薪を奉るなり、たとへばこれも民の肩をやすめんが為にや、宮内省に被納けるなり、其数は延喜の宮内式などにみえ侍り」とある。

（金子将大）

冬歌中

290 深きよの月にたか行道ならし笛のねすめる木枯の声

帚木卷云、神無月の頃ほひ、月面白かりし夜、内よりまかて侍るに、あるうへ人きあひて、此車にあひのりて侍れは、大納言の家にまかりとまらんとするに、此人のいふやう、「こよひ、人待らんやとなん、あやくしく心

くるしき」とて、此女の家、はたよきぬ道なりければ、あれたるくつれより池の水影見えて、月たに宿るすみかを過んもさすかにて、おり侍りぬかし。本より、さる心をはせるにや有けん、此男いたくすゝろきて、門ちかき廊の、すのこたつ物に尻うちかけて、とはかり月をみる。菊いと面白くうつろひわたりて、風にきほへる紅葉のみたれなど、哀とけに見えたり。ふところより笛とり出て吹ならし、「かけもよし」など、つゝしりうたふ程に云々。

〔出典〕雪玉集、七二二番。源氏物語、帚木卷、七八頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『冬歌中―冬十首』『承応』『湖月抄』『尻うちかけて―しりかけて』『ふところより―ふところなりける』。

〔訳〕 冬の歌の中

夜ふけの月のもと、誰かが道を通って行くらしい。笛の音が澄んで、木枯らしの音と（合わさって響いている）。

帚木の巻によると、十月の頃、月が美しかった夜、宮中から退出しますと、ある殿上人と一緒にあって、私（左馬頭）の車に相乗りしましたので、（私が）大納言の家に行って泊まろうすると、この人が言うには、「今夜、私を待っているであろう女の家が、妙に気がかりで」と言うので、この女の家が、通らねばならぬ道であったので、荒れた築地の崩れから月影を映した池の水が見えて、月でさえ宿る住みかを、さすがに素通りもできず、車を降りてしまいました。以前から情を交わしていたのであろうか、この男（殿上人）はひどくそわそわして、中門に近い渡り廊下の濡れ縁めいたところに腰をかけ、しばらく月を眺めている。白菊が（霜にあたりに）とても美しく一面に薄紫に色変わりして、風に競って散り乱れる紅葉など、いかにもしみじみと思われ

た。男は懷から笛を取り出して吹き鳴らし、「陰もよし」などと少しずつ謡うと云々。

〔考察〕『源氏物語』は雨夜の品定めで、左馬頭が話す木枯らしの女との体験談。当歌の結句「木枯らし」は、その女性が殿上人に返歌した「木枯らしに吹きあはする笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき」を踏まえる。

〔参考〕引用文の末尾にある「かけもよし」は催馬楽「飛鳥井」の一節で、「宿りはすべし」（泊まろう）の意味を持たせている。「飛鳥井に 宿りはすべし や おけ 陰もよし みもひも寒し みまくさもよし」。

（北井達也）

霰

291 ふりみたれ打音はけしなよ竹の折へくもあらぬ霰なからに

帚木卷。なよ竹の心地して、さすがに折へくもあらず。

〔出典〕雪玉集、一六六九番。源氏物語、帚木卷、一〇二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 霰

（霰が）盛んに降り打つ音は激しいなあ。なよ竹は折れそうにもない霰であるけれども。

帚木の巻。（空蟬の人柄はもの柔らかであるのに、無理に気強くしていたので）細くしなやかな竹のように感じて、さすがに折ることはできそうにもない。

〔考察〕帚木の巻で、光源氏は空蟬の寢床に忍び入り言い寄るが、空蟬は身分の違いから本来柔らかな性格ではあるが無理に拒む。その空蟬の様子を「なよ竹」（細くしなやかな竹）と表わす。竹を「折る」とは契を結ぶこと。当歌は霰に打たれても折れない竹の様子を詠む。

（北井達也）

里雪

292 よる分し山路の雪のあはれをもふかくやたとる宇治の里人

総角巻云、人々あまた声して、馬の音聞ゆ。何人かは、かゝるさよ中に雪をわくへき。

〔出典〕雪玉集、三四二一番。源氏物語、総角巻、三三五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』『あまた声して—こえあまたして』。

〔訳〕 里の雪

夜に山道の雪をかき分けて来た（匂宮の）愛情を、奥深くまで探り求めるであろうか、宇治の里人は。

総角の巻によると、多くの人の声がして、馬の鳴き声が聞こえる。誰がこのような夜中に、雪をかき分けて来るのだろうか。

〔考察〕当歌は匂宮が中の君への愛情から、夜中に雪をかき分けて宇治を訪れた場面を踏まえる。305番歌にも引用。

「深く」は「雪」の縁語。

（北井達也）

雪中待人

293 みせはやな独こほる、した折に打はらふ袖を松のしら雪

末つむ花の巻に、橘の木のうちもれたる、御隨身めてはらはせたまふ。うらやみかほに、松の木のをのれおきかへりて、さそこほる、雪も、「名にたつ末の」と見ゆるなどを云々。

〔出典〕雪玉集、一六九一番。源氏物語、末摘花、二九六頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 雪の中、人を待つ

見せたいものだな。松の木はひとりで（起き返り、枝に降り積もった）白雪がこぼれ落ちて枝が折れ、（雪の降り積もった）袖を（あなたを待つ間に）打ち払うのを。

末摘花の巻に、橘の木が雪で埋もれていたのを、（光源氏が）ご自身の隨身をお呼びになり払わせなさる。松の木がうらやましそうな表情で、ひとりで起き返って、積もった雪がさつとこぼれたので、「名にたつ末の」の句を思い出すなどを云々。

〔考察〕当歌の第三句「下折れ」は雪の重みなどで枝が垂れたり折れたりすること。結句の「松」に「待つ」を掛ける。下の句は、「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」（新古今和歌集、卷六、冬、六七一番、藤原定家）を踏まえる。

〔参考〕『雪玉集』は歌題の後に「永正元十二御月次」とあり、永正元年（一五〇四）十二月の月次会つきみなみでの詠作。

（小森一輝）

雪

²⁹⁴蓬生ほしに雪を隔んかけもなき朝日夕日を何おもひけん

蓬生卷云、霜月斗になりぬれば、雪あられかちにて、外にはきゆるまも有を、朝日夕日をふせく蓬むくらの陰に、ふかうつもりて、こしの白山おもひやらるゝ雪のうちに。

〔出典〕柏玉集、一二〇二番。源氏物語、蓬生卷、三四三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「雪を―雪や」「かけもなき―かげもなし」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 雪

蓬が生い茂る所には、雪をさえぎる草陰もないなあ。（蓬は）朝日や夕日を（さえぎり草陰に雪が積もると）なぜ思ったのだろうか。

蓬生の巻によると、十一月頃にもなると、雪やあらがしきりに降り、よそでは溶けて消えることもあるが、（末摘花邸では）朝日や夕日を遮る蓬や葎の陰に深く積もり、「越の白山」を思い起こさせる雪の中で。

〔考察〕『源氏物語』では、蓬は朝日も夕日もさえぎるが、雪はさえぎらず草陰に降り積もる、と描く。それに対して当歌は、冬の蓬には朝日や夕日ばかりか雪をさえぎるほどの草陰もないと詠む。『源氏物語』本文の末尾にある「越の白山」は「君がゆく越の白山知らねども雪のまにまに跡はたづねむ」（古今和歌集、巻第八、離別歌、三九一番、藤原兼輔）のように、雪深い山を連想させる歌枕。

〔参考〕「あさちふに雪やへだてん年もなし朝日夕日をなにおもひけん」（柏玉集、二二六一番、雪）

（小森一輝）

295 名にたかき雪の山なる葉もかふりぬる年はさらにかへさむ

涅槃経二十五云、雪山^ニ有^レ草、名^ケ曰^フ忍^ハ辱^ト。牛若^シ食^フ者即^チ得^ニ醍醐^ヲ云々。

〔出典〕雪玉集、六一二一番。涅槃玄義発源機要、巻第一。〔異同〕『新編国歌大観』『涅槃玄義発源機要』ナシ。

〔訳〕（雪）

噂に名高い雪の山にある（若返りの）葉があればなあ。過ぎ去ってしまった年月は改めて取り返そう。

涅槃經の二十五によると、雪山に草があり、それを名付けて忍辱にんにくという。牛がもし（これを）食べれば、たちまち醍醐を得る云々。

〔考察〕当歌の第二句「雪の山」は、ヒマラヤ山脈の異称。『涅槃經』の「醍醐」とは五味の一つで、牛乳を精製した中で最も美味なもの。非常に濃厚な甘味で薬用などに使用。ここでは牛が食せば醍醐のような乳が出るという意味か。『涅槃玄義發源機要』は宋代の智円が著わした『大般涅槃經玄義』の注釈書。

〔参考〕「恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに雪の山にや跡を消なまし」（源氏物語、総角の巻、三三三頁）。

（松本匡由）

296 ふるたひにかきあつめつ、此頃は心をつくる雪の山かな

朝兒巻云、わらはへおろして、雪まろはしせさせ給ふ云々。

又云、一とせ、中宮のおまへに雪の山つくられたりし、世にふりたる事なれと云々。

〔出典〕雪玉集、一六八〇番。源氏物語、朝顔巻、四九一頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕（雪）

（雪が）降るたびに（雪を）かき集めてはいるが、（いつ消えるかと思うと不安で）近頃は物思いの心を起こさせる雪の山だなあ。

朝顔の巻によると、（光源氏は）女童を（庭に）下ろして、雪まろがしをおさせになる云々。

また同じ巻によると、先年、藤壺中宮の御庭で雪の山をお作りになったが、（それは）世間ではありふれたことだけでも云々。

〔考察〕「雪まろばし」は雪をころがして丸い玉を作る遊び。「雪の山」を作るさまは『枕草子』八三段「職の御曹司におはしますころ」にも描かれている。

（松本匡由）

駅路凌雪

297分まよふ雪のふ、きの山ふかみ水むまやなる宿たにもなし

花鳥余情云、踏歌の人を饗応するに付ては、酒、或は湯漬などを用ゆるを是水駅といふ。簡略之儀也。又、飯駅とも菊駅ともいふは、ひきつくるひて饗応する儀也。

〔出典〕雪玉集、三〇一六番。花鳥余情、第一三、初子。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『花鳥余情』（源氏物語古注釈叢刊2）「付ては―つきて」「水駅といふ―これを水駅といふ」「簡略之儀也―事そき簡略する心也」。

〔訳〕雪の街道を歩く

吹雪の中、雪をかき分けさ迷い歩くが山奥なので、手軽な宿さえもない。

花鳥余情によると、男踏歌の舞人をもてなすにおいては、酒、または湯漬け等を用いる所を水駅という。簡単な接待である。また、飯駅とも菊駅ともいうのは、食事を整えてご馳走する接待である。

〔考察〕歌題の「駅路」は宿駅と宿駅を結ぶ道路、「凌雪」は雪を冒して歩くこと。「踏歌」は中国から伝わった集団歌舞。足を踏み鳴らして歌い舞うもので、平安時代には宮中の初春の行事として盛行、正月十四日に男踏歌、十六日に女踏歌が行われた。

〔参考〕『花鳥余情』は文明四年（一四七二）に七一歳の一条兼良が著わした『源氏物語』の注釈書。応仁の乱を避け奈良に移り住んだ五年間の執筆。はじめに自序があり、四辻善成の『河海抄』の足りない部分を補い、誤った部分を正すために著した旨を記す。

（松本匡由）

関路雪

298 ^柏まよひ来てす、まぬ駒よ峰の雲関路の雪を幾重とかしる

韓退之。雲横^ニ泰嶺^ニ家何^{クニカ}在^ル。雪擁^ニ藍関^ニ馬不^{スハ}前^マ。

〔出典〕柏玉集、一一八三番、二〇七〇番。韓愈、左遷至藍関^ニ示^ニ姪孫湘^ニ。

〔異同〕『新編国歌大観』「駒―馬」（一一八三番、二〇七〇番）。『和刻 古今事文類聚』（前集卷之三十一、雜興）ナシ。

〔訳〕 関所の雪道

ここまでさ迷い来て、進もうとしない馬よ。山の峰に雲が幾重にも立ちこめ、関所に通じる道を雪が幾重にも埋めているのを知っている（から進もうとしない）のだろうか。

韓退之。雲は泰嶺山脈に立ちこめて、わが家はどこにあるのだろうか。雪は藍田関を埋めて、わが馬も進もうとしない。

〔考察〕韓退之（韓愈）は唐代の文人、政治家。唐宋八大家の一人。「藍関」は陝西省藍田県にあった関所。韓愈の漢詩は原田憲雄『韓愈』（『漢詩大系』第一一卷、集英社、一九六五年）三三七頁に掲載。

（村上泰規）

積雪

299人はいさ幾重の雪のふる道に本来し駒の心をそ見ん

〔出典〕雪玉集、一六九八番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 積雪

人にはさあ（道はわからないが）、雪が幾重にも降り積った旧道を、以前よくここを通った馬に任せてみよう。

〔考察〕当歌の第三句「ふる」は「降る」と「古」の掛詞。第四句「もと来し駒」は、「夕されば道も見えねどふるさとはもと来し駒にまかせてぞゆく」（大和物語、五六段「越前の権守兼盛、兵衛の君といふ人にすみけるを、年ごろはなれて、またいきけり。さてよみける。」）による。

〔参考〕『雪玉集』には歌肩に「永正十三十一御月次」と記され、永正十三年（一五一六）十一月の月次歌。

（村上泰規）

行路雪

300 ^碧かち人は思ひたえねと降つもる雪こそ駒の道しるへなれ

韓非子。齊桓公伐孤竹^ヲ。春往冬還迷惑^{シテ}失^レス道^ヲ。管仲曰、「老馬之智可^レ用」。乃放^ニ老馬^ヲ而隨之遂^ニ得^レ路^ヲ。

〔出典〕碧玉集、七五一番。韓非子、説林上卷二二、三〇四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『和刻 古今事文類聚』（後集卷三八、馬、老馬識道）ナシ。

〔訳〕 行路の雪

歩いて行く人は（雪のせいで）物思いが絶えないけれども、降り積もる雪こそ馬にとっては道しるべなのだ。

韓非子。斉の桓公が孤竹の国を伐った。行きは春だが帰りは冬で、迷って道が分からなくなった。すると管仲が、「老馬の知恵が役に立つのだ」と言い、そこで老馬を放してそのあとに従って行くと、やがて道が分かった。

〔考察〕『韓非子』は、己の愚かな心を省みて聖賢の知恵を師とすることを説く箇所。

〔参考〕『碧玉集』には歌題の下に「永正元年十一月二十五日禁中月次御会に」とあり、永正元年（一五〇四）十一月二十五日に禁中で催された月次御会での詠作。

（村上泰規）

橋上雪

301 板はしの霜にたにこそまれの跡をいかに待みん雪の山本

鶏声茅店月、人跡板橋霜。

〔出典〕雪玉集、一七二四番。温庭筠「商山早行」（191番歌、参照）。

〔異同〕『新編国歌大観』『和刻古今事文類聚』（別集、卷二五）ナシ。

〔訳〕 橋の上の雪

霜が降りた板橋でさえ人の足跡は少ないのに、どんなに（人の訪れを）待っているだろうか、雪の山のふもとでは。

刻を告げる鶏の声、茅ぶきの旅籠の上の月。板橋を覆う霜、その上に残る人の足跡。

〔考察〕当歌は人の往来が多い橋でさえ人跡がまだだから、雪の降った山のみとは訪れる人も無かろうと思ひやる。

（島田薫）

林雪

302 春秋のにしきの梢折かへて玉の林をうふる雪かな

謝恵連。雪賦曰、庭^{ニハ}列^{ニハ}瑤階^ヲ林^{ニハ}挺^{ニハ}瓊樹^ヲ。

〔出典〕雪玉集、四〇〇番。文選、賦篇下、雪賦、九〇頁。〔異同〕『新編国歌大観』『和刻本文選』ナシ。

〔訳〕 林の雪

春（の花）や秋（の紅葉）の錦のように美しい枝を織り直して、玉の林を植える雪であるなあ。

謝恵連。雪賦によると、（雪が積もると、）庭には玉の階が並び、林には玉の樹が生えたようである。

〔考察〕「雪賦」は前漢の梁王と文人たちのやりとりに仮託して、雪の美を詠んだもの。当歌は「瓊樹」（玉のように美しい木）を「玉の林」に読み換え、林に雪が降った時の情景を春秋の景色と対照させて詠む。当歌の第三句は「折かへて」とあるが、「梢」を折ってしまうと木に雪が積もらないので、「錦」の縁語で「織りかへて」と解釈する。例「たつた姫野べのにしきをおりかへて梢にさらす神なびの杜」（正治初度百首、秋、九五七番、季経）、「小倉山ふもとの錦おりかへて梢に秋の過ぎにけるかな」（万代和歌集、卷六、冬、一二六七番、八条院高倉）。

〔参考〕「時知らぬ榊の枝に折りかへてよそにも花を思ひやるかな」（狭衣物語、卷四、二二六頁）。

（島田薫）

深雪

303 おれかへり枝よりおつる雪やまたあゐより青き松の木の木

荀子、見于春部。

〔出典〕雪玉集、一六九六番。〔異同〕『新編国歌大観』「木の本―木のした」。

〔訳〕 深い雪

（雪の重みで）折れ曲がつた枝から雪は松の木の下に落ちるが、その松（の葉）はやはり藍より青いなあ。

荀子、春部に見える。（24番歌、参照）

〔考察〕当歌は『荀子』の「学不^レ可^レ已^ム、青^キコト出^デ於^ニ藍^{ヨリ}而青^シ於^ニ藍^{ヨリ}」を踏まえ、雪が落ちる松の青さを詠む。松の青さが冬に引き立つことは、次の304番歌、参照。

〔参考〕303・304番歌に詠まれた「折れかへる」は、尾花や萩・芦・竹など曲がりやすい草木に使われることが多く、松に用いるのは珍しい。

（金子将大）

松雪

304 いくたひか雪のうちにもあらはれんおれかへる松の本のみとりは

朗詠集詩句、見于秋部。

〔出典〕柏玉集、一一五八番。〔異同〕『新編国歌大観』「おれかへる―折りかへる」。

〔訳〕 松の雪

何度、雪の中にも表れるだろうか。（雪の重みで枝が）折れ曲がってしまった松本来の緑は。

和漢朗詠集の詩句は、秋部に見える。（166番歌、参照）

〔考察〕当歌は『和漢朗詠集』所収の詩句「十八公、榮^ハ霜^レ後^ニ露^ハレ、一千年ノ色^ハ雪^ノ中^ニ深^シ。」（166番歌に引用）を踏まえて、何度も雪から現れる松の緑を詠む。

〔参考〕「青山^ニ有^レ雪^ノ詠^ニ松^ノ性^ニ」（和漢朗詠集、下、松、四二三番）。

（金子将大）

雪朝

305 けさのまのまたほのくにとふ人はいかに夜ふかき雪を分けん

宇治の巻。またよふかき程の雲のけはひ、いとさむけなるに、人くあまた声して、馬の音聞ゆ。何人かは、かゝるさよ中に雪をわくへき。

〔出典〕雪玉集、一六八九番。源氏物語、総角、三三五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月鈔』『あまた声して―こゑあまたして』。『承応』『雲のけはひ―雪のけはひ』。

〔訳〕 雪の朝

今朝ほど、まだ明け方に訪ねてきた人は、どのようにして深夜に深い雪をかき分けて来たのだろうか。

宇治の巻。まだ夜深い時分の雲の気配がいかに寒そうなか、多くの人の声がして、馬の鳴き声が聞こえる。誰がこのような夜中に、雪をかき分けて来るのだろうか。

〔考察〕『源氏物語』は大君の死後、雪の中、匂宮が中の君を弔問する場面（292番歌に引用）。当歌はこれを踏まえ、

深い雪をかき分けて人が訪れてきた朝を詠んだもの。「夜ふかき雪」に「夜深き」と「深き雪」を掛ける。『三玉和歌集』には歌肩に「続撰五大永三二廿五」とある通り、『続撰吟抄』巻五に収められ、大永三年（一五二三）二月二十五日に詠まれ、詞書に「禁裏御月次御短尺に」とある。

（金子将大）

禁庭雪

306よもの山もかゝみとこ、にうつり来て雲井の庭をみかく雪哉

〔出典〕雪玉集、一七二二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 宮中の庭の雪

四方の山も鏡のように見える雪がここ（宮中）に移って来て、宮中の庭を美しく装うことだなあ。

〔考察〕雪山が鏡のように見える典故は307番歌、参照。当歌は宮中の庭の雪景色を詠む。

（北井達也）

庭雪

307四方の山の鏡もあれとめに近きおもかけあかぬ庭の雪哉

うき舟の巻云、雪のふりつもれるに、我住かたを見やりたまへは、かすみのたえゝに、木末はかりみゆ。山は、かゝみをかけたるやうに、きら／＼と夕日にかゝりきたるに云々。

総角巻云、風のいとはけしければ、しとおろさせ給ふに、よもの山の、かゝみとみゆる云々。

〔出典〕雪玉集、四九八四番。源氏物語、浮舟、一五四頁。源氏物語、総角、三三三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 庭の雪

四方の雪山が鏡のように輝くこともあるけれども、見慣れた庭の雪景色は見飽きないことだなあ。

浮舟の巻によると、雪の降り積もっている中を、（匂宮は）あのご自身が宿られた方（浮舟の住まい）に目を向けなされると、霞の絶え間絶え間に梢ばかりが見える。山は鏡を掛けているように、きらきらと夕日に輝いているので云々。

総角の巻によると、風がとても激しいので、（薫は）薮を下ろさせなされると、四方の山が鏡のように見える云々。

〔考察〕当歌は「目に近き」（見慣れた）庭も、雪が降り積もると一変するさまを詠む。

〔参考〕浮舟の巻は、雪山が夕日を浴びて鏡のように輝いているさまを描く。一方、総角の巻は物語本文が途中で切れられ、本来は「風のいと激しければ、薮おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。」で、岸辺の氷が四方の山を鏡のように映している景色を描写する。しかし浮舟の巻と当歌の内容に合わせるため、意図的に本文を途中で切ったと考えられる。

（北井達也）

庭雪

308 数ならぬ垣ねの雪は分出る跡より外にたれをいとはん

初子の巻の詞、事ふり侍り。

〔出典〕雪玉集、四五八七番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 庭の雪

とるに足らない身分の者の垣根に降り積もった雪は、雪をかき分けて出ていく人の足跡以外に、誰（の訪問）を拒むだろうか。

初音の巻の文章（により、それ）は言いふるされています。（10 番歌、参照）

〔考察〕当歌は、雪の中を出ていった薄情な人は拒むが、その他の人は歓迎する、という意味。初音の巻は新春を迎えた六条院の庭の景色を描写した場面で、「数ならぬ垣根の内だに、雪間の草わかやかに色づきはじめ」（身分の低い者の垣根の内さえ、雪の消え間から初草が若々しく見えはじめ）の一節を当歌は踏まえる。

（北井達也）

鷹狩

309 ゆふ日かけにしきと見えてとふきしのはねとりちらしましらふの鷹

〔出典〕雪玉集、四二一〇番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 鷹狩

夕日の光に（照らされ）、羽が錦のように見えて飛ぶ雉に交じり、雉の羽をあちこちに散らかす真ましろ白斑ふの鷹であるなあ。

〔考察〕夕日に輝き錦織物のように光沢を放つ雉に襲いかかる鷹を詠む。結句の「ましらふ」に「交じらふ」と「真白斑」を掛ける。

【参考】「真白斑」は羽に白い斑点のある鷹を言う。たとえば「白き大鷹」を詠んだ長歌に「枕づく つま屋の内に鳥座結ひ 据ゑてそ我が飼ふ 真白斑の鷹」（万葉集、卷一九、四一五四番、大伴家持）とある。また顕昭の『六百番陳状』では、「大原や野べのみゆきにところ得て空とる今日の真白斑の鷹」（冬上、野行幸、顕昭）に対して、延長六年十二月五日の大原野行幸に関する一節「白斑と申す鷹、いつしか鳥を空とりて、御輿の鳳の上に参りゐて侍りけるに、夕日は山の端に漸く近づきて、峰の紅葉とところどころに錦をさらせり。鷹の色は白妙にして、雉毛は紺青をのべたり。」を引用している。

（小森一輝）

晩頭鷹狩

310 夕日影おちくる鷹にあふ鳥のはねはにしきをみたす色かな

【出典】雪玉集、三六一九番。【異同】『新編国歌大観』ナシ。

【訳】 晩方の鷹狩

夕日が沈む折、急降下してくる鷹に襲われた鳥の羽は、錦が乱れ散る（ように映える）色であるなあ。

【考察】当歌の第二句「落ち」は、夕日と鷹を修飾する。結句の「みたす」は参考歌により「満たす」ではなく「乱す」と判断して、散乱する羽が夕日を浴びて錦のように見えると解釈する。

【参考】「唐錦乱れる野辺と見えつるは秋の木の葉の降るにざりける」（是貞親王家歌合、三四番）は、野原に散らばっている落ち葉を錦に例える。

（小森一輝）

夕鷹狩

311 ^柏あかなくに山のはなくはと斗に入日やおしきけふの狩人

いせ物語云、狩はねんころにもせて、酒をのみのみつ、大和歌にかゝれりけり云々。此段の末に云、十一日の月もかくれなんとすれは、かのむまの頭のよめる。

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん

〔出典〕 柏玉集、一二二〇番。伊勢物語、八二段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 夕刻の鷹狩

もつと楽しんでいたいのに、山の際がなければと言わんばかりに日没を残念がつているのだろうか、今日の狩人は。

伊勢物語によると、狩はそれほど熱心にもせず、酒ばかりを飲みながら、和歌に熱中していた云々。この章段の末によると、十一日の月も（山に）隠れようとするので、あの馬の頭が詠んだ（歌）。

名残は尽きないのに、もうはや月が隠れてしまうのか。山の際が逃げて、月を入れないようにしてほしい。

〔考察〕「馬の頭」（在原業平）の和歌は、酔つて早々に酒宴を抜けようとした惟喬親王を、山の端に隠れようとする月に見立てて名残を惜しんだもの。当歌は狩りを続けたいため、日没を惜しむ狩人の心情を詠む。

〔参考〕鷹狩は日本でも古来より愛好され、平安貴族の間でも流行したが、仏教的罪業感からしばしば禁令が出された。

（小森一輝）

網代

312 いつまてと命はかなきひを虫のおなし波なるあしろ守らん

蜉蝣、毛詩註、出于秋部。

〔出典〕雪玉集、三七一九番。〔異同〕『新編国歌大観』「守らん―守るらむ」。

〔訳〕 網代

いつまで（生きられる）と（言えないほど）命がはかない^{ひおむし}蜉蝣ではないが、氷魚^{ひお}と同じ波間にある網代の番を（網代の番人は）しているのだろう。

毛詩「蜉蝣」の注釈は、秋の部に掲出。（174番歌、参照）

〔考察〕当歌の第三句「ひを虫」に「氷魚^{ひぎ}」を掛ける。「ひを虫」はカゲロウの類で、詩経に「朝生暮死」とある通り、はかないものに例えられる。氷魚は鮎の稚魚、無色半透明で長さは二、三センチ。歌題の「網代」は川の瀬に設けた魚とりの設備。冬に京都の宇治川で氷魚を捕えるのに用いたことで有名。

〔参考〕「朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに現れわたる瀬々の網代木」（百人一首、権中納言定頼）。

（松本匡由）

冬暁

313 みなと入に千とりなく也暁のうしほもいまや遠のうら風

朗詠集。低翅^レ沙^ハ鷗^ハ潮^ル落^ル時。

〔出典〕雪玉集、四一七三番。和漢朗詠集、上、春、暮春、四六番。

〔異同〕『新編国歌大観』「冬暁―暁」。『和漢朗詠集注』「時―暁」。

〔訳〕 冬の暁

船が港に入り、千鳥の鳴き声が聞こえる。夜明け前に潮も今は遠のき浦風（が吹いているなあ）。

和漢朗詠集。羽をおさめて下りたつた砂上の鷗は、潮が引いたとき（に^{かも}いる）。

〔考察〕当歌は千鳥の鳴き声から潮が引いたこと（『和漢朗詠集』の漢詩による）、また船が入港して船の魚を狙っていることを想像する。

〔参考〕初句の「港入り」と結句の「遠の浦風」は、瀟湘八景の「遠浦帰帆」によるか。

（松本匡由）

